

# ナポレオン戦争と歴史小説

越野 剛

## 序の1 目的と方法について

本論ではナポレオン戦争を背景にした三つの歴史小説、ミハイル・ザゴスキンの(1789-1852)の『ロスラヴレフ、あるいは1812年のロシア人』(1830)、ファデー・ブルガーリン(1789-1859)の『ピョートル・イヴァノヴィチ・ヴィジギン』(1831)、ニコライ・グレチ(1787-1867)の『黒衣の女』(1834)を取り上げる。<sup>1</sup> これらの作品ではロシアとフランスという二大勢力の対立が中心的なモチーフとなっているが、それらは文明と野蛮、合理主義と神秘主義、普遍主義とナショナリズム、男性と女性、貴族と平民というような一連の対立項と様々な位相で結びつき、ネガティブまたはポジティブな価値を伴って豊かなイメージ群を生み出している。そうした対立項とイメージを分析することによって、作品内に反映された世界観・歴史観を明らかにするのが本論の目的である。

今回とりあげる作品は同じ歴史小説でもプーシキンの『大尉の娘』(1836)やトルストイの『戦争と平和』(1863-69)に比べれば、あまり文学的価値の不高くない通俗的な小説とみなされてきた。しかし通俗的であるというのは、作品が紋切り型の登場人物やステレオタイプな価値判断で構成されているということであり、上述したような単純な対立項を用いた作品構造の分析が有効となるはずである。そして通俗的な作品は同時代の読者の社会的な意識から大きく離れることもなく、その世界観・歴史観を知る上で貴重なテキストだといえる。もちろん通俗的な小説といっても1830年代の書籍市場はいまだ未発達であり、数千部が売れば大成功であった。しかしながらこの時期の散文小説の流行は新しい読者層の獲得を助長し、その後の大衆文学の発達の契機となったといえる。<sup>2</sup> その推進力のひとつとなったのが本論で対象とするような歴史小説であった。<sup>3</sup>

---

<sup>1</sup> 以下、本論で用いるテキストは次のものによった。*Загоскин М.Н.* Рославлев, или Русские в 1812 году // Сочинения в двух томах. М., 1987. Т.1. С.287-618; *Булгарин Ф.В.* Петр Иванович Выжигин // Иван Выжигин. М.:Захаров, 2002. С.330-539; *Греч Н.И.* Черная женщина // Сочинения Николая Греча. С.-П., 1836. Ч.1-2.

テキストからの引用ページはアラビア数字、巻数をローマ数字で示す。

<sup>2</sup> 帝政ロシア時代の大衆文学の歴史およびその研究史については以下の学位論文が参考になる。久野康彦『革命前ロシアの大衆小説：探偵小説、オカルト小説、女性小説』、2003年、博士号取得論文。

<sup>3</sup> 例えばザゴスキンの『ユーレイ・ミロスラフスキー』(1829)や『ピョートル・ヴィジギン』の前作にあたるブルガーリンの『イヴァン・ヴィジギン』(1829)はこの時代を代表するベストセラーであった。

3 人の作家は保守的な思想の持主ということで文学史上は同じような位置づけを与えられることが多かった。しかしながら作品世界の構成はそれぞれ異なっており、むしろ際立った対照を見せることが多い。ナポレオン戦争における作家の個人的な体験の違いもまた興味深い。ザゴスキンはロシア軍に志願して戦場で負傷まで負ったのに対して、ブルガーリンはナポレオン配下のポーランド軍団に参加してロシア遠征を体験している。一方でグレチは実戦には参加しなかったが、1812年の戦火の中で雑誌『祖国の子 (Сын отечества)』を創刊し、戦時下のジャーナリズムに従事した。戦後の同誌は祖国戦争に関する貴重な歴史資料を多く掲載することになる。このような戦争体験の違いがそれぞれの作品にもたらしたであろう歴史的なまなざしの差異もまた考慮に値する。<sup>4</sup>

## 序の2 ナポレオン戦争と歴史小説

1812年のナポレオンのロシア遠征をクライマックスとする露仏間の戦争は、文化史的にも大きな意味を持っている。外国軍の侵略とその撃退はロシア人の愛国心を高揚させ、ヨーロッパの解放者という自己イメージを作り出した。農奴から貴族までの全国民が一致して戦ったという「祖国戦争」の神話は、<sup>5</sup> 近代的な国民国家のナショナリズムが形成されていくひとつの契機となった。一方でロシア文化におけるナポレオンのイメージは、ロマン主義的英雄でもありながら、侵略者＝反キリストでもあるという独自の両義性を負うものとなった。<sup>6</sup> 1812年を題材にした文学作品は戦時中に書かれたものを初めとして無数に存在する。<sup>7</sup> 祖国戦争について一行も書かなかった同時代の詩人を探すのが困難なほどであるし、多くのルポルタージュや回想記が残されている。しかし小説が書かれるようになるには1830年代を待たねばならなかった。

ロシア文学史において1830年代は散文小説が盛んになった時期とされている。多くのジャンルが花開いたが、最も人気のあったもののひとつが歴史小説であった。ロシアにおける本格的な歴史長編小説はミハイル・ザゴスキンの『ユーレイ・ミロスラフスキー、あるいは1612年のロシア人』(1829)をもって始まるとされる。スコットランドの歴史小説家ウォルター・スコット(1771-1832)の影響の色濃いこの小説はロシアの歴史小説のモデルと

---

<sup>4</sup> 3人の伝記的情報は以下の事典によった。Русские писатели: Библиографический словарь. М.: Просвещение, 1990. Т.1-2.

<sup>5</sup> これが戦後に形成された一面的な言説であり、戦時中には地主貴族に対する農奴の反乱も多発していたことが最近の研究で指摘されている。Y.Y. Tarasulo, *The Napoleonic Invasion of 1812 and the Political and Social Crisis in Russia* (Ann Arbor: UMI, 1983).

<sup>6</sup> ロシア文化におけるナポレオンのイメージの歴史については以下を参照。M.W. Wesling, *The Russian Representation of Napoleon: A Cultural myth* (Ann Arbor: UMI, 1998).

<sup>7</sup> 祖国戦争を題材にした文学作品の各ジャンルの概観を知るためには以下の論文集が参考になる。Отечественная война 1812 года и русская литература XIX века. М.: Наследие, 1998.

なった。<sup>8</sup> その後もファデイ・ブルガーリンの『僭称者ドミトリー』(1830)、『マゼッパ』(1833-1834)、イヴァン・ラジャチニコフの『氷の家』(1835)、プーシキンの『大尉の娘』(1836)等の歴史小説が次々と世に出された。

歴史小説の隆盛よりも以前、1806-1807年の戦役の時期においても、すでに愛国心の高まりがロシア史への関心と呼び起こしていた。デルジャーヴィンやセルゲイ・グリーンから17世紀のスムータの時代を題材にした叙事詩を書き、<sup>9</sup> オーゼロフの戯曲『ドミトリー・ドンスコイ』が上演されて観衆を熱狂させている。ナポレオン戦争後にはカラムジンが大著『ロシア国家史』(1816-1829)を著し、30年代の歴史小説の多くに題材を提供することとなる。

ザゴスキンの『ユーリイ・ミロスラフスキー』やブルガーリンの『僭称者ドミトリー』もまた17世紀のポーランドとの戦争を描きながらも、むしろ19世紀初頭のナポレオン戦争のイメージが影を落としていることはすでに指摘されている。<sup>10</sup> 祖国戦争を舞台にした『ロスラヴレフ、あるいは1812年のロシア人』も、『ユーリイ・ミロスラフスキー』の姉妹編として構想されていることは明らかである。従って1830年代に陸続と書かれた歴史小説のジャンルにおいて、ナポレオン戦争の記憶は中心的な位置を占めたといえることができる。

## 1. ミハイル・ザゴスキンの場合 ——野蛮国と文明国のナショナリズム

### 『ロスラヴレフ』物語の概要

主人公ロスラヴレフは愛国心に燃える青年貴族だが、フランスかぶれの親戚たちの間では変人扱いされている。フランス最良の友人ザレツキーとフランスを憎悪する将校フィグネルが対照的に配置され、全編がロシアとフランスの対立のモチーフに貫かれている。ナポレオン軍との戦闘で負傷したロスラヴレフは許婚者ポリーナの住む田舎へ戻るが、嵐の夜の墓場というゴシック小説風の場面で、捕虜になったフランス軍将校のセニクルと秘密の結婚式を挙げるポリーナを目撃してしまう。絶望したロスラヴレフは戦闘を求めて出立する。ナポレオンに占領されたモスクワで身動きが取れなくなったロスラヴレフを、友人のザレツキーがフランス軍人に変装して助け出す。その後、ロスラヴレフは農民パルチザンの戦いを指導して、力で勝るフランス軍を見事に打ち破

<sup>8</sup> すでに1810-1820年代にはスコットの主要作品はロシア語に翻訳され、たいへんな人気を博していた。スコットとロシアの歴史小説の関係については以下の著書を参照。

*Альтшулер М.Г. Эпоха Вальтера Скотта в России: Исторический роман 1830-х годов. С.-П.: Академический проект, 1996.*

<sup>9</sup> ゴーリンによれば、これらの作品は侵略者に対する戦いにおける民衆(ナロード)の参加を重視しており、国民総意の戦いという当時の公的イデオロギーと符合している。*Зорин А. Кормя двуглавого орла... Литература и государственная идеология в России в последней трети XVIII – первой трети XIX века. М.: НЛЮ, 2001. С.157-186.*

<sup>10</sup> *Фирман Л.Г. Черный И.В. Проблематика русского исторического романа 1830-1840-х годов // Филологические Науки. 1987. №3. С.24.*

る。ここまでが第 1-3 部だが、最後の第 4 部ではロシア軍はすでにパリに向かって進撃中であり、ロスラヴレフのいる部隊はダンチヒに籠城するフランス軍を攻撃している。第 4 部の前半は枠小説の形式を取っており、夜の休息時間に士官たちが「人生で最も恐怖を感じたとき」というテーマで体験談を順番に物語る。最後の話が終わった時に士官たちはフランス軍の夜襲に遭い、怪談を馬鹿にしていた砲兵士官ザリャチエフも本当の恐怖を味わうことになる。この戦闘でロスラヴレフは捕虜になり、ダンチヒ市内に連れて行かれる。ここで彼はイタリア商人に変装したパルチザンの将校フィグネルや元許婚者のポリーナと再会する。フランス軍人と結婚した神罰なのか、ポリーナの夫はすでに戦死しており、産まれたばかりの幼児は餓死し、彼女自身もやがてロシア軍の市内砲撃によって爆死する。この場面は「死んだ夫が妻を迎えに来る」というレノーレ譚のモチーフを感じさせる。戦争は終わり、心の傷も癒えたロスラヴレフはポリーナに託された髪の毛を故郷の土に埋め、彼女の妹オーリャと結婚式を挙げる。

『ロスラヴレフ』の中にしばしば表れる「ロシア＝野蛮国」「フランス＝文明国」という対比は当時のヨーロッパ中に広まっていたステレオタイプなイメージであり、ロシアの知識階層もおおむねそれを共有していた。エカテリーナ 2 世以降のロシアの貴族階級は生活の各面でフランス文化を受容しており、ナポレオン戦争の時代に上流社会ではフランス語の使用が普通であった。今回取上げた三つの小説の主人公たちも、自由にフランス人と会話できるばかりか、時にはフランス人に変装しても疑われないことがない。18 世紀に啓蒙思想家を輩出し、革命を通じて貴族階級の解体したフランスと、いまだに農奴制を残すロシアの対比はイメージ的にも分かりやすい。ヨーロッパの後進国ロシアには北方やアジアのイメージが重ねられ、「野蛮人」「スキタイ人」「タタール人」「コサック」「マローズ」「ウォッカ」といったステレオタイプなレッテルを貼られることがしばしばであった。

「...フランス人はいまだに俺たちをヨーロッパ人だと認めないし、パンと塩のもてなしぶりに対して野蛮人だなんてのたまう始末。ヨーロッパ全土の色々な気候が揃っているというのに、連中は俺たちの祖国を白熊の土地などと呼んでいる。何よりも腹立たしいのは、わが国の御婦人方がウォッカを飲んでいるとか、男に殴られるのが好きとかいう話が、本に載ったり噂されたりしていることだ。どうだね、君！生活の糧を得るために馬鹿げた話を書いたり出版したりしているパリのくず屋どもをいちいち決闘に挑むように指図するっていうのかい...。連中の言葉のせいで俺たちがタタール人になるわけもないし、クリミアが寒くなるはずもないさ...」(305 : 1 部 2 章)

引用したのは『ロスラヴレフ』の冒頭の場面で、ロシアを馬鹿にするフランス人に怒り心頭の主人公に向かって、友人のザレツキーが野蛮な国というロシアのイメージはフランス人にとっては当たり前のことであり、いちいち怒っても仕方がないと諫めている。『ロスラヴレフ』は戦場以外の場面もロシアとフランスの対立のモチーフに満ち溢れているが、

その際に「文明」と「野蛮」という対立項に基づくイメージ群が重要な役割を果たす。

例えばフランスかぶれのラドゥギナ公爵夫人のサロンでは、フランス人旅行者が恋愛の話題に触れて次のように言う。「ロシアでは愛が暖まらないのは残念なことですな。ちょうど良い季節だというのにねえ。公爵夫人、あなたの国では暖かい時期なんてあるんですか。まったくもう (...)。五月だというのに。とんでもない国です」(308 : 1部3章)。寒さについてのステレオタイプはナポレオン軍の敗戦の言い訳にも用いられる。物語からのいささか逸脱気味のモノローグの中で、語り手はロシアに対する様々な偏見を列挙しながら、フランスの作家たちがナポレオンの退却をマローズのせいにして、軍事的敗北を認めたくないことを嘲笑する。「もしわれわれが敵軍に勝利したことが一度もないとしたら、どうしてナポレオン軍は全滅したのだろうか。だいたい、とんでもないこと！マローズに何の意味があるというのか？」(539 : 4部1章)<sup>11</sup>

「文明的な戦争」と「野蛮な戦争」という対比も指摘することができる。この場合の「野蛮さ」の評価は、軍人以外の人々が戦争に参加することの是非をめぐってなされる。1812年の祖国戦争は、農民を含む全てのロシア人が参戦する「国民戦争 (народная война, национальная война)」だったと言われる。この言葉は『ロ斯拉ヴレフ』の中でもしばしば使われている。例えば先の引用で主人公を激怒させた傲慢なフランス人は、ナポレオンがロシアを侵略すれば「国民戦争」になるという議論に対して、それは「文明人 (просвещенный человек) なら誰でも嫌悪するような、野蛮人 (варвары) にしか似合わないような戦争の仕方」(304 : 1部2章)だと決めつける。「この戦争は国民的なものになるだろう」というロ斯拉ヴレフの意見に対して、フランスかぶれのリディナ夫人は「ナポレオンはイタリアやドイツにも行ったじゃありませんか。戦うのは軍隊であって、住民には何の関係があるのかしら。まさか野蛮なスペイン人のやり方を借りるなんていうの」(368 : 2部1章)と反論する。ロシアの「国民戦争」と1808年以来パルチザンの蜂起が続くスペインが「野蛮な戦争ぶり」という形容で結びつけられている。

戦争が始まってからも同様の描写が続く。フランス軍に占領されたモスクワでは愛国心に燃える商人たちが火をつけてまわる。これも民間人によるパルチザン活動であり、フランス側から見ればルール違反の「野蛮な戦争」である。炎上するモスクワを見たナポレオンは「野蛮人ども、スキタイ人どもめ」(478 : 3部4章)とつぶやく。火事を見たナポレオンが「やつらはスキタイ人だ」と実際に口にしたという同時代人の証言もある。<sup>12</sup> 糧秣

---

<sup>11</sup> 『ロ斯拉ヴレフ』の5年後、パルチザンの英雄デニス・ダヴィドフがナポレオン軍の敗因は寒さであったという通説を否定する論文を発表している。Давыдов Д. Мороз ли истребил французскую армию в 1812 году? // Библиотека для чтения. №10. 1835.

<sup>12</sup> Count P.-P. De Segur, *Napoleon's Russian Campaign* (London: Michael Joseph, 1959), Translation from the French by J. David Townsend, p. 112. 著者のセギュール伯爵はナポレオンの随員としてロシア遠征に参加した。有名なこの回想録が出たのは1824年であり、ザゴスキンはこれを読んでいたものと思われる。

の補給のために派遣した徴発隊（фуражиры）がコサック兵や武装した農民に襲われるのに業を煮やしたフランス軍の勇将ミュラーが、そうした行為は「どんな場所でも当たり前になっているような慣習に対してまっこうから反するものである」（536：3部9章）と苦情を述べる場面も同じ理屈に従っている。

フランス人が文明の肯定的なイメージを自らに重ねるのに対して、ロシア人の愛国者が文明のイメージを否定的に用いる場面を指摘することができる。例えばフランス軍の脅威が間近に迫るモスクワで、ナポレオンの声明文をロシア語に翻訳して頒布していた商人が捕まって処刑される場面がある。実際に起きたヴェレシチャーギン事件を念頭に置いたものである。<sup>13</sup> これを見たロシア軍将校は「あんな奴は兵隊にでも取ってやればよかったのにな。そうすればナポレオンの声明文なんか訳そうとは思わなかったろうに。商人だとさ！フランス語の知識なんて商売人には似合うわけがないだろう。ほら、有象無象の連中が文明人（просвещенные люди）の真似を始めたわけだよ」（447：3部1章）と皮肉を言う。平民階級の間人が下手な啓蒙を受けるとろくなことにならないという文明の否定的イメージが描かれている。

フランスびいきのロシア士官ザレツキーだが、モスクワ市内の教会が馬小屋に使用されているのを見てさすがに激怒する。「もしこれが貴方がたが名づけるところの偏見のなさど啓蒙（просвещение）だというのなら、そんなものは悪魔にでも食われてしまえ」（489：3部5章）。ここでもフランス兵の冒流行為が行き過ぎた啓蒙主義の所産であると解釈されている。<sup>14</sup>

「文明的なフランス人」と「野蛮なロシア人」のステレオタイプ自体が逆転しまう場面も見ることができる。例えば、モスクワからの撤退時に出されたクレムリンを爆破するというナポレオンの指令について、語り手は「自分も他の誰も得をしないというのに、それが何であろうとも破壊してしまえなどというのは、野蛮人と狂人だけがすることである」（540：4部1章）と痛烈に非難している。一度は奪われた恋人の手紙と髪の毛をロスラヴレフ達に取り戻してもらったフランス人将校は、「このコサックが、野蛮人が、このような心を持っているなんて誰も思いもしなかったろう。このロシア人はフランス人となるに値する」（529：3部8章）と言って感激する。こうした例では、フランス人には野蛮、ロシア人には文明という逆転した価値が与えられている。

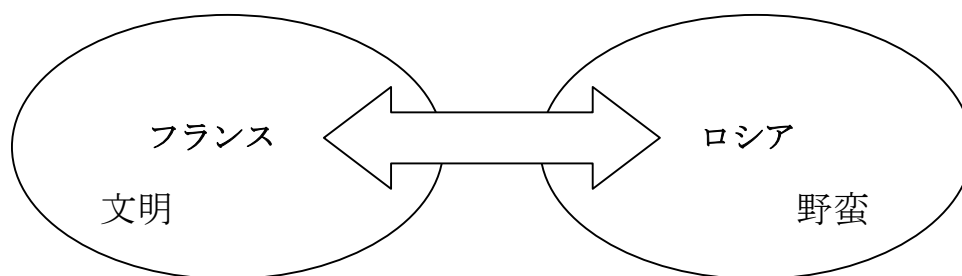
「フランス＝文明＝プラス価値」／「ロシア＝野蛮国＝マイナス価値」という対立軸はザゴスキンの小説だけに見られるものではなく、祖国戦争を題材にした様々なテクストの

<sup>13</sup> トルストイは『戦争と平和』の中でヴェレシチャーギンには死刑になるほどの罪はなく、民衆の暴動を鎮めるスケープゴートにされたという説を取っている（3巻3部25章）。

<sup>14</sup> 教会を馬小屋として使用するフランス兵というのは、同時代の雑誌記事や回想録に繰り返し現れるモチーフである。M.W. Wesling, *The Russian Representation of Napoleon*, p. 101. 例えば、両親の無事確かめるためにモスクワ市内に潜入したマスロフの手記に酷似した場面がある。Маслов С. Путешествие в Москву во время пребывания в оной французов // Русский Архив. Т.2. Кн.7. 1908.

中で指摘できるものである。しかし『ロスラヴレフ』ではそれが極端な形で現れており、二大国間の戦争における様々な価値判断がすべて文明／野蛮という軸をめぐる展開するときと言える。戦争が始まるまでの社交界を中心とする場面では固定的だったロシアとフランス双方のイメージは、ナポレオンのロシア遠征が始まってからの戦場の場面では対立項が入れ替わったり（フランス人の野蛮な行為、ロシア人の文明的行為）、文明のイメージが否定的になったり（ヴェレシチャーギン事件）、野蛮のイメージが肯定的になったりする（モスクワ住民の愛国的な放火）。このような対立項によって構成される世界観は、1840年代以降に展開する西欧派とスラブ派の論争とつながり、ロシアにおけるナショナリズムの形成の流れに属するものだといえる。

## 『ロスラヴレフ』の構図



### 2. ブルガーリンの場合 ——ナショナリズムを相対化するもの

#### 『ピョートル・ヴィジギン』物語の概要

長篇小説『イヴァン・ヴィジギン』の続編で、今度はその息子が主人公として活躍する。遺産相続や政略結婚をめぐる社交界小説的なプロットの中に、ナポレオンのロシア遠征を舞台にした冒険小説的な筋立てがはさまる構造になっている。主人公ピョートル・ヴィジギンにはリーザという恋人がいる。彼女は孤児の身の上だが、実は故ブレチステンスキー公爵がフランス人女性との間に設けた子供であり、莫大な遺産の相続人であることが判明する。この遺産を横取りしようとクルデュコフ公爵夫妻とホフレンコフ伯爵は陰謀をたくらみ、リーザを誘拐して田舎屋敷に閉じ込めてしまう。ここでナポレオンのロシア遠征が始まり、小説の舞台は社交界から戦場に移り変わる。ヴィジギンは戦闘で何度も捕虜になっては脱出し、フランス軍とロシア軍の間を行き来する。その間に『ロスラヴレフ』と同じように農民パルチザンのリーダーとなってフランス軍と戦ったりもする。リーザは田舎屋敷から逃げ出してヴィリニウスに落ち延び、軍医を勤めるフランス人の伯父に出会い、ナポレオン軍と行動をともにする。リーザとヴィジギンは何度も偶然の出会いを繰り返すが、そのたびに運命の悪戯で引き離されてしまう。炎上するモスクワをクライマ

ックスにして戦争の描写は終わり、舞台は社交界に戻る。リーザはたまたま看病したロシア将校から死の直前に遺産を譲り受けて、ヤロスラフスカヤ夫人を名乗っている。このリーザのふるまいは不可解だが、ブルガーリンにとっては許される範囲の打算的行為のようである。リーザの結婚が名目的なものであることを知らないヴィジギンは衝撃を受ける。「トゲのないバラ」の紋章に隠れて自分を支援してくれる謎の女性（ドニエプロヴァ伯爵夫人）とリーザの間でヴィジギンは揺れ動く。しかしプレチステンスキー公爵の遺産をめぐる訴訟や陰謀にも決着が付き、リーザへの疑いも晴れて二人はめでたく結婚する。

フェデイ・ブルガーリンは体制派のジャーナリストとして活躍し、一方で秘密警察に通じた文壇の密告屋であった。ソ連時代にはそうした否定的な側面が強調されたせいで、影響力のある作家だったにも関わらず、十分な研究がされてきたとはいえない。ただし欧米では、大衆文学研究や文化社会学的なアプローチを中心としてそれなりの研究の蓄積はある。ロシアでは90年代にレイトブラトが野心的な論文を次々に発表している。<sup>15</sup> ロシア文学史の中にブルガーリンを正しく位置づけ直すことがこれからの課題となろう。

興味深い論点のひとつは作家の民族性である。<sup>16</sup> ブルガーリンは『回想録』(1846-1849)の中で「私は旧リトアニア大公国の旧ミンスク<sup>ヴネエフオダ</sup>州に生まれた」と書いている。<sup>17</sup> 「旧бывший」という語が繰り返されているのはリトアニア大公国が3度のポーランド分割(1772-1795)によってロシア帝国に編入されて消滅したからである。<sup>18</sup> 最後の分割でブルガーリン家もロシア帝国の臣民となるが、この時ブルガーリンは5歳であった。<sup>19</sup> コシチューシュコの名が「我が家では敬愛されていた」<sup>20</sup> とあるように、ブルガーリンの家庭はポーランド愛国的な気分を保ち続けていた。その後、ブルガーリンはペテルブルグの士官学校を出てロシア軍に勤務するが、祖国再興の希望にかられてナポレオン配下のポーランド軍団に入る。そのためブルガーリンはナポレオン側についてロシア遠征を体験している。戦後は作家活動を始め、最初はポーランド語を用いるが、次第にロシア語で作品を書くようになる。ポーランドの文学や歴史文化をロシア社会に紹介することにも努め、デカブリストのルイレーエフやベストゥージェフは彼の影響でポーランド語を習っている。<sup>21</sup>

<sup>15</sup> 例えば文芸誌 *Новое Литературное Обозрение* の1999年40号はブルガーリン研究を特集しており、レイトブラトを中心にして欧米の研究者のものも含めた複数の論文を見ることが出来る。

<sup>16</sup> ブルガーリンの作家活動におけるポーランド的要素については以下の論文を参照。

*Рейтблат А.И.* Булгарин и Польша // *Русская литература*. 1993. №3. С.72-82.

<sup>17</sup> *Булгарин Ф.В.* Воспоминания. М.:Захаров, 2001. С.13.

<sup>18</sup> 正確には1791年のポーランドの新憲法においてリトアニア大公国は制度的に消滅した。

<sup>19</sup> 自伝によると、最後の戦闘の混乱を逃れるために、ブルガーリンはこのとき家族や召使と共に森の中で避難生活を送った。*Булгарин Ф.В.* Воспоминания. С.14-25.

<sup>20</sup> *Булгарин Ф.В.* Воспоминания. С.30. ブルガーリンのファーストネーム「ファデー Фаддей」はポーランド語では「タデウシュ Tadeusz」となるが、これはコシチューシュコから取られたものである。*Рейтблат А.И.* Булгарин и Польша. С.74.

<sup>21</sup> *Рейтблат А.И.* Булгарин и Польша. С.75.

同じ祖国戦争を舞台にしていながら、『ピョートル・ヴィジギン』が『ロスラヴレフ』とは違った価値の対立構造を持っているのは、ブルガーリンの持つポーランド的要素によるところが大きい。

ちなみにブルガーリンはナポレオンに対しては生涯にわたって敬意を抱き続け、自らが編集する保守派の新聞『北方の蜜蜂』にナポレオンに関する記事をしばしば掲載した。<sup>22</sup> そのナポレオン観は独自のものであり、諸民族の解放者とかロマンチックな英雄のイメージとは遠く、賢明な統治者、啓蒙的な専制君主としての理想像であった。<sup>23</sup> 『ヴィジギン』の中でナポレオンは捕虜になった主人公に度量の広いところを見せる支配者として描かれている（447：17章）。<sup>24</sup>

ブルガーリンの『ヴィジギン』にも野蛮国ロシアと文明国フランスという対比が見られるが、ザゴスキンの『ロスラヴレフ』がそうであったほど重要な意味を持っていない。どちらの小説も社交界を中心とした戦争前のロシア社会の雰囲気を描いているが、その中でフランスの外交官とロシアの愛国的な若者の言説が対立する同じような場面を比較することができる。『ヴィジギン』では主人公の友人たちが「われわれ（＝ロシア人）をフランス人に似たものにするのが、われわれの名誉を高めることだ」と考えているフランスの外交官に憤って、フランスの文化は尊敬するけれど「フランス人になりたいとは思わない」（376-377：6章）と語る場面がある。フランスの外交官は言葉を引用されるだけで実際には登場しないし、議論は1ページも続かない。それでも小説中で野蛮／文明という対立イメージがはっきりと用いられている箇所は他には見られない。文明の優劣というような問題にブルガーリンはあまり興味を持たないようでもある。一方で『ロスラヴレフ』のラドゥギナ公爵夫人のサロンの場面では、フランスがロシアを占領することで野蛮なロシア人の文明が高まりうるかという点をめぐってフランスの外交官とロスラヴレフが何ページにもわたって議論をしている（309-313：1部3章）。しかも野蛮／文明という対立イメージはここだけに現れるのではなく、小説全体の構造に浸透しているのは上に述べた通りである。

『ピョートル・ヴィジギン』におけるフランスとロシアの戦争は絶対的な二つの価値観の対立ではなく、相対的な二つのナショナリズムの争いとして描かれている。その相対化を保証しているのはポーランドという第3のファクターである。それもポーランドとロシアの間の曖昧な境界領域をなすリトアニア大公国（現在のリトアニアとベラルーシ）という空間が重要な意味を持っている。

『ヴィジギン』にはこの地域に出自を持つ人物が多く登場する。ヒロインのリーザの養父であるロムアルド・シュミガイロはリトアニア出身の貧乏士族（シュリャフタ）である。

<sup>22</sup> *Рейтблат А.И.* Булгарин и Наполеон // Новое Литературное Обозрение. 1999. №40. С.89.

<sup>23</sup> *Рейтблат А.И.* Булгарин и Наполеон. С.91-92.

<sup>24</sup> 勇敢な捕虜と度量の広い独裁者というモチーフは歴史小説にしばしば見られるものであり、プーシキンの『大尉の娘』（1836）の主人公とプガチョフの対峙の場面にも共通する。

シュミガイロという名字もリトアニア系であることを推察させる。戦時中にリーザを手助けするモリコンスキー家の人々はヴィリニウス在住の地主貴族である。逃亡中のヴィジギンをフランス軍将校と勘違いして宿を提供するロムバリンスキーは白ロシアの地主貴族である。主人公のヴィジギンにしても、父親のイヴァンは白ロシアの地主貴族の家で育っている。小説の前半と後半の世俗小説的な部分はペテルブルグが舞台だが、ナポレオンとの戦争の場面にはその多くがヴィリニウスやミンスクを中心とする元リトアニア大公国領が選ばれている。ヴィジギンが何度も捕虜になっては脱走して、フランス軍とロシア軍の間を行ったり来たりするのもこの領域である。

この「行ったり来たり」という表現は、旧リトアニア大公国領に登場する人物たちの性格づけをよく示している。例えばヴィリニウスの地主モリコンスキー家の人々は、ナポレオンがポーランド軍団を引き連れてやってくるというニュースを知って、各人がばらばらな印象を抱く。家長のモリコンスキー氏がロシアに共感し、夫人にいたっては捕虜になった主人公ヴィジギンを家にかくまうのに対して、息子たち（アドルフとエドゥアルド）はナポレオン軍に加わることを決意する。「どんな会話も政治的な論争になってしまうのだった。というのも家族のそれぞれが目の前の出来事について意見を異にしているからだ」（400：10章）。ロシアにもポーランドにも心惹かれるというモリコンスキー家の人々の心情をよく反映しているのが娘たちの中途半端な意見である。「フランスとポーランドの戦士たちに会いたってどれほど望んだことかしら！...ただしアレクサンドル皇帝が不愉快な思いを絶対にしないという条件でね」（388：8章）。

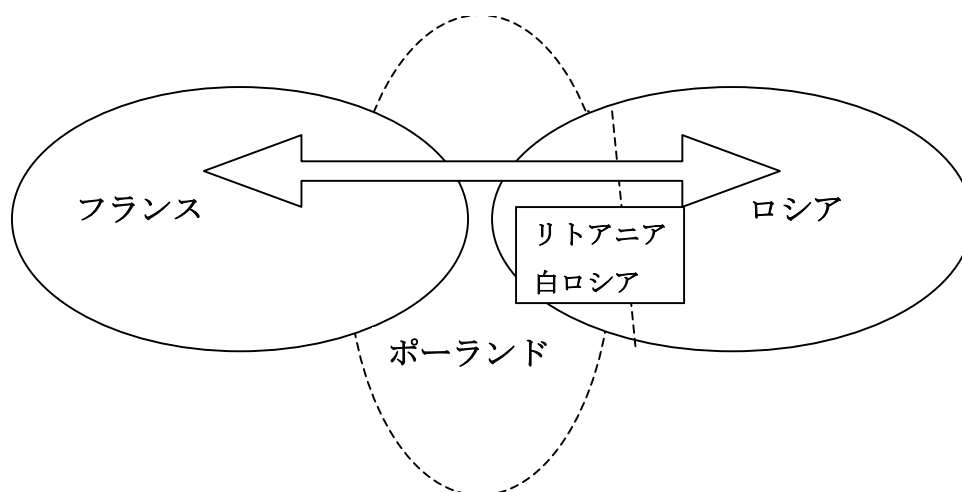
リトアニアの士族ロムアルド・シュミガイロ（ヒロインのリーザの養父）はロシア軍で糧秣担当官として勤務することになる。ロムアルドはナポレオン軍の捕虜になるが、偶然に出会った敵の騎兵が甥のヴィケンチイ・シュミガイロだと分かり驚く。「リトアニア全土がわが軍の到着を待っているという話だ」と甥が言えば、ロムアルドは「われわれのもとではアレクサンドル皇帝が尊敬されているし、きみたちの到着を喜ぶのは極々少数の人だけだろうよ」（398）と反論する。このようにシュミガイロ家も二つの陣営に分裂している。白ロシアのポーランド系貴族ロムバリンスキーにいたっては、戦時中には酒盛りばかりする役立たずな義勇軍を組織してナポレオン支持を公言しておきながら、戦後はちゃっかりとペテルブルグの社交界に復帰する。

主人公のヴィジギンはフランス軍とロシア軍の間を物理的に行き来はするが、ロシア皇帝に対しては常に忠実であり続ける。しかし物語の背景に登場する人物たちの所属意識はきわめて曖昧であり、ロシア対フランスという大きな対立の枠組みを不透明なものにしている。対立が相対化されてしまう理由は、ひとつにはポーランドという第3のナショナリズムの存在であり、さらにはリトアニア大公国というロシアとポーランドの狭間にある境界領域の存在である。作者のブルガーリン自身がこの境界領域の出身者であり、ロシアとポーランドの狭間を行き来する作家であった。秘密警察に文壇の内情を密告していたのは

事実だが、逆にポーランド独立運動への関与を疑われてもいた。<sup>25</sup> レイトブラトはブルガーリンの政治的立場はリベラルな君主主義者であったとし、ポーランド文化をロシアに紹介した点を高く評価しつつ、同時代人の評について以下のようにまとめている。「このようにして彼は半分ポーランド人・半分ロシア人として両民族の間で綱渡りをしていたのだ。どちらにとってもよそ者のままで。…彼に対する評価はお定まりになっていて、ポーランド人の間ではポーランドの利害に対する裏切者の変節漢だったし、ロシア人の間ではポーランドの代弁者、もっとましな場合でも、ロシアを知りもしないし愛してもいない、自分の幸福だけを追求する人間なのだった」。<sup>26</sup>

ブルガーリンの一族が属していたリトアニア大公国は、かつてはキエフルーシの傘下にある東スラヴ人の土地だったが、13世紀にリトアニアに征服され、16世紀にポーランドと連合王国を形成し、18世紀末にはロシア帝国に併合された。こうした土地の歴史が、ロシアからもポーランドからもはみ出してしまうブルガーリンの姿に影を落としているように思われる。<sup>27</sup> 『ピョートル・ヴィジギン』にはザゴスキンの『ロスラヴレフ』にあったような二極的な価値の対立は存在しない。ロシアとフランスの間のポーランド、ロシアとポーランドの間のリトアニア大公国というように対立を相対化する中間項が入れ子的に存在している。そのような領域に生きる登場人物たちは、良くいえば現実的な、悪くいえば打算的な振る舞いを見せる。このような作品世界の構造はポーランド系ロシア作家ブルガーリンの経歴とも重なるものであり、他のロシアの歴史小説が見落としてしまうようなナポレオン戦争の一面を示してくれている。

### 『ピョートル・ヴィジギン』の構図



<sup>25</sup> *Рейтблат А.И.* Булгарин и Польша. С.79.

<sup>26</sup> *Рейтблат А.И.* Булгарин и Польша. С.81-82.

<sup>27</sup> 最近のベラルーシにはブルガーリンを自国の文化史の中に位置づけようとする動きがある。例えばベラルーシの文化に貢献した人々の著作を集めたシリーズ「ベラルーシ文庫 Беларускі Кнігазбор」の一冊にブルガーリンの選集が最近になって含められた。*Булгарын Ф.В.* Выбранае. Мінск: Беларускі Кнігазбор, 2003.

### 3. グレチの場合 —— 神秘主義と無国籍者イメージ

#### 『黒衣の女』物語の概要

物語は主人公ケムスキー公爵の財産をめぐる陰謀を扱った世俗小説的なプロットと、公爵が幻視する「黒衣の女」をめぐる幻想小説風のプロットに分けることができる。第1の筋では公爵の義理の姉で莫大な遺産の相続をたくらむアレフチーナ、第2の筋では公爵の精神的な支えとなる神秘家のアリマリが重要な役割を果たす。前半部には予言をめぐるいくつかの逸話が組み込まれているが、その中のひとつで公爵は占い女から「真実の幸福を知るのはおまえが棺に入ったときであろう」と告げられる。急病のため硬直状態になり死んだと勘違いされた公爵は、予言通り棺の中で真実に自分を愛してくれる女性ナタリヤの心を知る（ゴシック小説風の「生きたままの埋葬」のモチーフ）。公爵はアレフチーナの陰謀によって、結婚したばかりの妻を家に残し、イタリアのスヴォーロフ将軍のもとでフランス軍と戦う羽目に陥る。激しい戦闘で捕虜になった公爵は、アリマリに教えてもらった謎の合言葉のおかげで死を免れる。公爵が戦死したという誤報を聞かされ、産まれたばかりの娘が死んだと偽られたナタリヤは家を飛び出し、ネヴァ川のほとりで消息を絶つ。一方で妻と子が死んだという知らせを聞いた公爵は、絶望のあまり家に戻ることを望まず、今度はカフカースで軍隊を率いてペルシアと戦い、またしても捕虜になってしまう。幼少時から何かがあるたびに公爵の未来を暗示してきた「黒衣の女」の幻影は、いつの間にか妻ナタリヤの姿をとるようになっていた。イタリアとカフカースでの長い戦争と虜囚の時期を経て1816年によくケムスキー公爵はペテルブルグに戻ってくる。アリマリや親友たちの助けもあって、アレフチーナの陰謀や家族の消息が少しずつ明らかになっていく。また後半部にはケムスキー家の養子で、アレフチーナの陰謀によって遠ざけられたセルゲイ・ヴェトリンのエストニアのロシア海軍での成長の物語が挿入されている。セルゲイはエストニアでナージャという孤児の娘と恋に落ちるが、やがて彼女がケムスキー公爵の失われた娘であることが明らかになる。物語の最期では幼少時に公爵が初めて「黒衣の女」を目撃した場所で、同じ姿をした妻ナタリヤと不思議なめぐりあわせで再会することができる。

グレチの小説は専ら1812年の事件を描く『ロスラヴレフ』や『ピョートル・ヴィジギン』とは違い、1797年から1816年までの長期間を扱っている。1812年のナポレオンのロシア遠征は前半部と後半部の間の時期に設定され、物語の背景としての役割を果たしているだけである。しかしフランスとロシアの二大国間の戦争の影は小説において様々なレベルで投影されており、とりわけ合理主義と神秘主義というふたつの思想潮流の争いという形で映し出されている。

主人公ケムスキー公爵はお人よしの理想家であり、世俗の生活では義姉アレフチーナに騙されてばかりいる。一方で超自然の出来事や神秘的な思想について物思いにふけるのを好み、話題を共有できる仲間がないことを悲しんでいる。<sup>28</sup> 幼少時にペストの蔓延する

<sup>28</sup> ケムスキー公爵の性格付けのいくつかは、ドストエフスキー『白痴』（1868-69）の主人

モスクワでバルコニーから女性が飛び降りるのを目撃して衝撃を受けて以来、ケムスキー公爵はたびたびこの「黒衣の女」の幻影を見るようになる。幻の女性の示す動作は常に未来の出来事を暗示する。ケムスキー公爵の神秘的なものへの興味は「黒衣の女」の幻視と結びついている。

公爵は負傷した友人を見舞うためにフィンランドを訪れるが、そこで謎めいた風貌の哲学者アリマリに出会う。ロマン主義風の夜話の集まりの中で予言や前兆をめぐる逸話が順繰りに物語られる。ペテルブルグの冬宮に向かう真夜中の謎の行列（1741年の宮廷革命の前兆）、スウェーデン王カール11世が見たという夜の国会議事堂の処刑台の幻影（5代後のグスタフ3世の暗殺を予兆）、<sup>29</sup> ペテルブルグの上空を飛ぶ「炎の蛇」（エカテリーナ2世の死を予兆）などの目撃談が語られるが、どれも政権交代を予言する話であることは興味深い。アリマリはフランスの幻想作家カゾット（1720-1794）がフランス革命を予言したという逸話を語る（I-76-82：9章）。1788年のこと、とあるアカデミー会員の家でパーティーが催される。人々はヴォルテールやディドロを称え、神の非在のための乾杯を提案し、「理性の君臨」を待望し、「革命がすぐにやってくること、迷信とファナティズムが哲学に場所を譲るに違いないこと」に意見が一致した。しかしカゾットは、席上にいたシャンフォー（作家、1740-1794）、コンドルセ（数学者、1743-1794）、バイイ（政治家・パリ市長、1736-1793）等に対して、革命の結果、「ただ理性と哲学によって統治される」ことの所産として6年以内に彼らが非業の死を遂げること、そしてルイ16世とマリー・アントワネットの処刑を予言した。カゾットは自らの死をも予言してその場を立ち去る。この話を書き残したラアルプ（作家、1740-1803）だけは革命を生き残り、転向してキリスト教徒に改宗することを予言される。<sup>30</sup> 行き過ぎた啓蒙主義・合理主義は流血の革命に至るものとして否定され、カゾットの予言のような理性では把握できない神秘的な現象と対比されている。

アリマリは無神論者や自由思想家は必ず時と共に「ファナティスト、神がかり、異端審問官、考えの違う者に対する行き過ぎた迫害者」（I-89：10章）になるものだと主張する。アリマリはそれに続いてナポレオンについて語り始める。1795年の王党派のヴァンデミエールの反乱の際にパリに滞在していたアリマリは、この時に頭角を現した若きナポレオンを目撃していた。とりわけ強調されるのはデモーニッシュな眼力の描写である。「小さな帽子が目の上にかぶさっていたが、あのような目は見たことがなかったし、これからも見ることはないだろう。その目だけが内面の興奮を示していた。目のみが采配をふるい、目のみが全ての動きを支配していた。その魔方陣に陥ったものは誰でも不可解な呪力に捕らわれてしまうのだった。私は彼の視線から目をそらすことができなかった」（I-92：10章）。

---

公ムイシュキン公爵に影響したと考えられている。*Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-1983. Т.9. С.466.*

<sup>29</sup> この話はメリメの短編小説『カール11世の幻想』（1829）の引き写しである。

<sup>30</sup> ラアルプの手記は1829年にロシア語に翻訳されており、その内容はグレチが紹介しているものとはほぼ同じである。Уолпол, Казот, Бекфорд: Фантастические повести.

Л.: Литературные памятники, 1967. С.244-248.

ナポレオンが姿を現す場面はここだけだが、小説世界の価値体系の中ではフランス革命の鬼子として位置づけられ、<sup>31</sup> 「行き過ぎた啓蒙主義」のシンボルの役割を果たす。例えばエカテリーナ 2 世の葬礼の日にケムスキー公爵と再会したアリマリは、「偉大なる宿命がロシアを待ち受けている。西方で渦巻き始めた恐ろしい嵐の中で」(I-113: 13 章)と語り、ナポレオン戦争を予言する。1799年にケムスキー公爵はイタリアに行き、スヴォーロフ將軍の配下でフランス軍と戦うが、そこで 3 度目に出会ったアリマリは自らの世界観をさらに明確に述べ立てている。「私は自由思想の嘲笑や 18 世紀のあつかましさを軽蔑して、書物によって自然を研究するのではなく、自然の作用と自己の精神の中に研究を見出しました。こうした知識やその知識を得るための手段を手に行っているのが私だけだとは思わないでください。戦争と革命の恐ろしい嵐の中で、自然哲学者 (натуралисты-философы) の学派が成長しているのです。自然の研究をするにあたって、目に見えるもの見えないものすべての源泉たるところの神の認識から始めようとする人々です」(I-205: 26 章)。18 世紀の啓蒙主義的な世界観と、シェリングの自然哲学を思わせるようなロマン主義的世界観が、フランスとロシアの戦争を背景としながら新旧世代の対立として描き出されている。

先ほどのナポレオンの眼力の描写は、目に見えない磁力の流体が人から人へ影響を与えるという動物磁気説の概念を反映している。アリマリの言うところによれば「意思の力だけでこちらを見ていない人を振り返らせることができる」のであり、そのためには「その人間を背後からでも数秒間じっと見つめて、その人のことだけを念じればよい」(I-108: 12 章)。実際にケムスキー公爵は視線の力だけで愛するナタリヤを振り返らせることに成功している (I-107)。動物磁気説の創始者メスメルは革命前夜のフランスで成功を収めるが、科学アカデミーの調査によって自説を否定されてしまう。アリマリはメスメルの学説を否定したアカデミー会員に「もう少しで決闘を申し込むところ」(I-108) だったという。動物磁気説はフランスでいったん否定された後、ドイツでロマン派の学者に歓迎され、自然哲学の体系に組み込まれる。<sup>32</sup> ロシアでも 1820 年代の若い知識人たちがロマン主義文学やシェリングの哲学等と同じ流れの中で、いくぶんオカルト的興味を交えながらも動物磁気説を受け入れた経緯がある。<sup>33</sup>

グレチの『黒衣の女』はザゴスキンの『ロスラヴレフ』と同様にロマン主義の色合いが強い作品だが、後者のようなスラブ派的なナショナリズムは希薄である。それには無国籍者のようなアリマリのイメージの影響が大きい。アリマリの父はピョートル 1 世に招かれ

---

<sup>31</sup> グレチとは対照的にブルガーリンはナポレオンを「革命の火を消した男 (погаситель революции)」として賞賛する態度を示していた。*Рейтблат А.И. Булгарин и Наполеон. С.91.*

<sup>32</sup> その後もメスメルの学説は催眠術の形を取って生き残り、精神医学の発達に大きな影響を与えた。アンリ・エレンヴェルガー著、木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見』弘文堂、1980年、上 61-298 頁を参照。

<sup>33</sup> 越野剛「ロシア文学とメスメリズム」『ロシア語ロシア文学研究』第 31 号、1999 年、15-28 頁。

たイタリアの職人であり、アリマリ自身も両国を行き来する生活を送っている。少年時代はイタリアのイエズス会の学校で学び、15才から18才まではペテルブルグで神学校教師のセルリに指導を受けるが、彼は「修道僧でもないし、しかもプロテスタントだというのに、ロシアとギリシア正教と学問に対する愛着から、ロシアの修道院に移り住んだ」(I-199: 25章)という変わり者である。さらにイタリアのパヴィア大学での学生時代にはイエズス会士の長老のもとで古典文学を学んでいる。

アリマリ自身はカトリック教徒であり、ロシアを祖国とみなしているが、宗教や国家の境界を越えて行き来するさまは、自由な無国籍者を思わせる。フィンランドでの友人たちの集まりで、正教徒のロシア人と地元のプロテスタント牧師がローマ法王を笑いものにしても、アリマリは「反対もせず、微笑みながら黙っていた」(I-102: 11章)という。アリマリはイタリアで戦場に向かうケムスキー公爵に、危地に陥ったときに読むようにと何かの言葉が書かれた紙切れをわたす。フランス軍との戦闘で殺されそうになった主人公を救ったのはこの紙切れだった。小説中では明確な説明はなされていないが、アリマリはフリーメーソンのような秘密結社に入っていたように思われる。<sup>34</sup> メーソンもまた国家を超えた普遍主義の組織である。

『黒衣の女』の作者、グレチはペテルブルグ生まれではあるが生粋のロシア人ではない。先祖はプロテスタント派のチェコ人だったが、白山の戦い(1620年)以降はカトリック派に追われてドイツに移った。1730年代には作家の祖父がピロンの招きによってロシア帝国内のクールランドに移住した。<sup>35</sup> こうしたグレチの素性が『黒衣の女』のナショナリズム色を薄め、アリマリのような人物の登場を可能にしたと思われる。グレチの小説では、主要なプロットこそペテルブルグとモスクワで展開するが、西はポルトガル、フランス、イタリアから、北はフィンランド、エストニア、東はコーカサスに至るまでの広い地域を舞台にしている。ロシアとフランスの戦争が物語の背景になっていることは確かだが、むしろ啓蒙主義からロマン主義へという時代潮流の中で、合理主義と神秘主義が価値判断のための対立項として用いられており、ナショナリズムの対立はコスモポリタンの人物の活躍や舞台となる小説空間の広大さによって目立たないものにされている。

『黒衣の女』にしばしば現れる予言や神秘的な運命のモチーフは、ナポレオン戦争の中に隠された神の意志を見るという同時代の言説とも重なり合う。例えばアレクサンドル1世はナポレオンの侵略やモスクワの火事に様々な予兆を見て、クリュデネル男爵夫人などの神秘家との交際の中で、自分が神意によってヨーロッパの救世主の役割を授かったのではないかと考え、それが神聖同盟の構想に影響したといわれる。ゾーリンによれば皇帝の神秘的な宿命思想はその過度の普遍主義・コスモポリタニズムのせいで、ナポレオン戦争

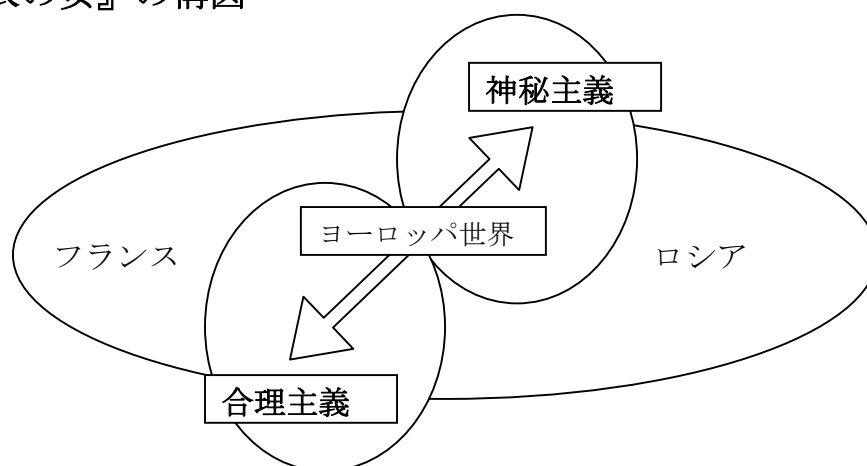
<sup>34</sup> ナポレオン戦争の時期にフリーメーソンの独特な身振りを知っていたために敵軍に救われた士官の逸話が実際に残されている。Масонство в его прошлом и настоящем. М., 1914-1915. Т.2. С.197-198.

<sup>35</sup> Русские Писатели: Библиографический словарь, М.:Просвещение, 1990. Т.1. С.217.

勝利の熱狂が過ぎると急速に人気を失っていったという。<sup>36</sup>

以上のような『黒衣の女』の世界観は、特定の土地を持たない「お雇い外国人」の家に生まれたグレチにふさわしいものであると同時に、ブルガーリンの場合とはまた違った位相で、他の歴史小説では見えなくなっているナショナリズム形成以前の人間の心性や、フリーメイソンに見られるような国家や宗教を超えた普遍的なネットワークの存在を示すものである。

## 『黒衣の女』の構図



まとめに代えて：ナポレオン戦争における女性のイメージ

本論の分析では述べもらしたことだが、物語の中で様々なイメージ群にポジティブ／ネガティブなイメージが賦与される際に、男性／女性の対立項が特異な役割を果たす場合がしばしば見受けられる。その例を今回分析した三つの歴史小説から取り上げることで、それぞれの世界観の特徴をもう一度まとめてみたい。

『ロスラヴレフ』ではロシアを捨ててフランス人将校と結婚したヒロインのポリーナが悲惨な運命をたどることになっている。1812年前後のジャーナリズムにはフランスかぶれの社交界の婦人を風刺する記事が多かった。<sup>37</sup> 『ロスラヴレフ』でもフランスの外交官と意見を同じくするのはラディギナ公爵夫人やリディナ夫人などの女性であった。興味深いことにザゴスキンは小説の序文でロシア貴族の女性とフランス軍捕虜の将校の結婚という筋書きは「本当の出来事に基づいている」(288)と述べている。『祖国の子』誌のある記事はフランス軍の捕虜が拘留されているいくつかの地方都市では、フランス人将校が舞踏会

<sup>36</sup> ゴーリンはアレクサンドル1世の神聖同盟構想とジュコフスキーの創作とを重ねて普遍主義的な神秘思想と当時の国家イデオロギーの問題を論じている。Зорин А. Кормя двуглавого орла... С.267-295.

<sup>37</sup> ナポレオン戦争に関わる女性のイメージに関しては以下を参照 M.W. Westing, *The Russian Representation of Napoleon*, pp. 27-33.

に招かれたり、子供にフランス語を教えるよう頼まれたりして人気を博し、中には結婚を望む貴族の娘もいるという噂を伝えている。「今は捕虜の身の上の連中は祖国に前例のない冒涇と暴力をなしたところだというのに、ロシア貴族の子女はこの犯罪行為の当事者たちと結婚することも厭わないという。なんとという災い!...」。<sup>38</sup>

アリトシューラーは『ロスラヴレフ』を分析して、ウォルター・スコットの小説ならば、ポリーナのように他国の男性を愛した女性が愛国心の欠如を非難されるようなことはありえないという。むしろ様々な陣営間を登場人物が行ったり来たりするのがスコットの小説のプロットの特徴なのである。<sup>39</sup> 『ロスラヴレフ』のヒロインは内面の心情をほとんど描かれず、フランス人との結婚以降はそもそも小説中に登場しなくなる。未完に終わった『ある婦人による未出版の手記の断章（ロスラヴレフ）』（1836）においてプーシキンはザゴスキンの小説の改作を試みたが、その際に心がけたのは設定をそのまま生かしながらヒロインの内面を詳細に描くことだった。

女性の否定的なイメージは敵のフランス兵に対しても映し出される。モスクワから引き上げるフランス軍の様子をロシア軍の将校が回想する場面がある。「連中がモスクワから撤退したときの様子ときたらなかったぜ。いやはやなんとも。婦人用のコートをもとっている奴はいるし、狐の毛皮外套を着てる奴はいるし、祭服のやつまでいやがった。まるで仮面舞踏会だぜ」（545）。<sup>40</sup> フランス軍の指揮官の一人であるミュラー将軍もその派手な服装について「全体としてなんだか男らしくないめかしぶり（не мужская щеголеватость）が、勇壮な装いの残りの部分と極めて異様な対照を成していた」（535：3部9章）と描写されている。このように『ロスラヴレフ』における女性のイメージは、祖国の裏切り者、あるいは自分とは異質なものに対する指標の役割をしばしば果たしている。

『ピョートル・ヴィジギン』でも、ロシア貴族の社交界の女性たちのフランスかぶれが手ひどく風刺されているが、むしろブルガーリンの小説で興味深いのは支配者に対してうまく立ち回るといふ役割が強調されるポーランド人女性のイメージである。例えば白ロシアの地主貴族ロムバリンスキー家では、戦時中にナポレオンを支持して義勇軍を組織するのは夫の役割だったが、戦争が終わってペテルブルグの社交界に復帰するとロムバリンスカヤ夫人が活躍を始める。ブルガーリンはポーランドには古来より裁判官を金で買収する習慣はない代わりに、酒と女で誘惑する手段が発達してきたと誇らしげに解説し、そのフォルスイ（форсы）<sup>41</sup> と呼ばれる習慣を丹念に紹介している。「ポーランドでは大人の女性も女の子も、男性を誘惑する仕方、頭をふらふらにさせて、希望をそそらせておいて、冗談で終わらせる仕方を、幼いうちから母親に仕込まれる。...このようにして、年代物のハン

<sup>38</sup> Сын отечества. 1813. ч.6. №26. С.304.

<sup>39</sup> Альтшулер М.Г. Эпоха Вальтера Скотта в России. С.92.

<sup>40</sup> 撤退するフランス兵が贅沢な婦人用外套を着込んでいたというのは同時代人の回想記や民衆のルポーク画の中にしばしば繰り返されるモチーフである。M.W. Westing, *The Russian Representation of Napoleon*, p. 32.

<sup>41</sup> ポーランド語で forsy には「金銭」、「力」、「努力」などの意味がある。

ガリーワインと若いポーランド娘の優美な眼差しを用いて裁判官を自分の側に引きつけるわざはフォルスイと呼ばれた」(478:21章)。さらにロムバリンスキー夫人はロシア人社会におけるポーランド人ネットワークの存在を示唆する。「こうした件ではロシア人と結婚した仲間のポーランド女性の幾人かが手伝ってくれるのですよ」(423:12章)。

仏軍に味方することを決めたアドルフ・モリコンスキーに対して、主人公ヴィジギンはかつて捕虜の自分をかくまってくれたアドルフの母が不愉快な目に遭っていないか心配する。しかしアドルフはポーランド女性のしたたかさを保証する。「彼女には何人かのフランスの将軍が庇護者になってくれています。われらがポーランド女性について心配することはありませんよ。わが国がどこに属することになったとしても、彼女たちが支配者を操縦してくれますから」(418:12章)。ロシアとフランスの狭間にあるポーランド、あるいはポーランドとロシアの狭間にあるリトアニアや白ロシアの地域のイメージは、もともと被支配者の指標が優勢である。それが女性イメージと結びつくことによって、支配者を欺くような逆転した価値を持つのだとも考えられる。

最後に『黒衣の女性』は小説の題名が示すとおり、現世から離れた神秘的な夢想の世界のイメージが女性と結びついている。フィンランドの田舎町で主人公たちが談笑する場面で、「どうして呪い師とかコーヒー占い屋とかそういう魔法使いの類はたいい女なのか、平民の粗野で教養のない女なのか」という疑問が飛び出す。アリマリは予言能力というもののは後天的なものではなく生まれつきの能力なのだという。女性の想像力は男性よりも力に満ちている。ところが教育やら社会生活といったものは、人々の知識を増やしてくれる代わりに、自然から授かった力を損なってしまう。「デルジャーヴィンが靈感に満ちた詩を書いているその家の向かい側の屋根裏部屋では、醜いフィン人もしくはユダヤ人の女が人々の運命を占っている。これこそ二つのポエジーであり、人間の二つの天性なのだ」(I-83:9章)。理性と文明が男性のイメージ(デルジャーヴィン)と結びついているのに対して、自然に由来するとされる神秘的な力は、女性・異民族・平民などの特性と重ねられている。

本論では1830年代に書かれ、ナポレオン戦争の時代を扱った三つの歴史小説の世界観をいくつかの対立項を軸にして分析した。ロシアとフランスの戦争を野蛮国と文明国の対決と見なし、物語の展開の中で文明と野蛮の価値を逆転させるというザゴスキンの『ロスラヴレフ』の手法は、全ロシア国民が一致して戦ったという祖国戦争の神話とあいまって、その後のナショナリズムの形成につながる流れの中に位置づけることができる。一方でブルガーリンの『ピョートル・ヴィジギン』はポーランドやリトアニアという境界領域を第三項として導入することによって、グレチの『黒衣の女』はコスモポリタンの価値にもとづく神秘主義を18世紀的な合理主義と争わせることによって、それぞれ対立軸をずらしている。ブルガーリンとグレチの小説にはロシアのナショナリズムがいまだ曖昧であった時代の混沌とした世界観の一側面を示しているとも考えられる。ナポレオン戦争はロシア人

が自国の歴史に対する意識を強める助けをしたが、その過程でロシア文学史におけるブルガーリンとグレチの名前は次第にマイナーなものになっていったのである。